

# 日本国際理解教育学会会報

JAPAN ASSOCIATION FOR INTERNATIONAL EDUCATION NEWSLETTER

Vol. 33 2008 (平成20年度) No. 1 平成20年10月14日 編集発行：日本国際理解教育学会事務局  
〒161-8539 東京都新宿区中落合4-31-1 目白大学内 TEL：03-5996-3166 FAX：03-5996-3125  
E-mail：kokusai@mejiro.ac.jp Website：http://www.kokusai.com

## 目次

巻頭の言葉	学会長挨拶	1	2007 (平成19) 年度総会報告 (事業報告・決算)	12
第18回大会	実行委員長報告	2	2008 (平成20) 年度事業計画・予算	13
第18回大会	分科会報告	3	理事会 (各委員会等) 報告	14
第18回大会	「公開シンポジウム」報告	5	会員だより	15
第18回大会	「特定課題研究」報告	6	公文国際奨学財団・海外派遣報告	18
第18回大会	清元の夕べ・茶会	7	お知らせ (これからの行事/イベント案内)	19
第18回大会	参加記	8	事務局通信	20
博学連携教員研修ワークショップ2008 in みんなく		11		

## 巻頭の言葉



### 学会の役割、「つなぐ」

日本国際理解教育学会長 多田 孝志

8月8日、壮大な規模で北京オリンピックの開会式が挙行されました。その直後に、ロシア軍のグルジアへの侵攻が報道されました。平和の祭典オリンピック開催中の国際紛争の勃発に、世界の今後の動向に暗澹たる思いをもった人々も多かったのではないのでしょうか。

オリンピック自体にも気がかりなことがありました。それは過度の勝利者礼賛であり、国威高揚の意図でした。自国の選手を応援する心情は当然としても、見事なプレーをした相手、敗れた選手への賞賛がもっと欲しいと思ったのは私ばかりではないのではないのでしょうか。第二次世界大戦後、まがりなりにも人類が歩いてきた平和共存への道が、政治的思惑によって分断されてしまうことへの危機感を常に持つ必要を感じました。

日本国際理解教育学会は国際平和の実現を希求すること

を設立の目的に掲げた学会です。本学会の特質は「つなぐ」機能を重視している点にあると考えます。

1991 (平成3) 年1月26日に学会は設立されましたが、当日配布された「設立の趣旨」には、「生涯教育の場で、学校、家庭、地域、社会のあらゆる機会を利用し、関係者の連携と協力の体制を整える必要がある」「東洋の太平洋に浮かぶ我が国が、21世紀に向けて、東洋と西洋を結び、南と北を繋ぎながら、世界の諸国民と平和共存する」「研究者、教育実践者、その他の関係者を糾合して、日本国際理解教育学会を発足」といった文章が記されています。

さまざまな人々・機関、民族や国、また研究と実践を「つなぐ」ことにより「希望ある未来」の構築にむけての新たな知見や知性を共創していこうとする方向が設立の趣意書からも読み取れます。

本学会は、第17回大会での特定課題研究テーマ「転換期を迎えた国際理解教育」での論議を受け、「つなぐ」機能を重視した新たな取り組みを推進してきています。

本年6月に開催された富山大会のシンポジウムでは「学校の中の多文化共生の構築を目指して」をテーマにマイノリティに対する共生のあり方を論議しました。10月24日(金)には、東京都板橋区立志村小学校で「鯨をテーマにした国際理解教育実践研修会」を開催し、鯨類学の研究者と、教育現場の実践者が共同で教材を開発し授業を創ります。また2009年2月には奈良県香芝市教育委員会と学会が連

携し、市全体での国際理解教育を推進することになっています。2009年6月の第19回大会(同志社女子大学)では、特定課題に「ことば・音と国際理解教育」を掲げています。日韓中の研究・実践者が協働し、東アジアにおける国際理解教育の教材開発を進める企画も進展しています。

会員各位におかれては、ぜひ本学会の多様な共同研究にご参加ください。また本学会の特色としての「つなぐ」機能を生かした多様な企画を提言していただきたいと願っています。

## 日本国際理解教育学会第18回研究大会報告

### 国際理解教育が富山に根付くことを確信した大会

第18回研究大会実行委員長 田尻 信壹

#### 第18回研究大会に234名が参加

日本国際理解教育学会第18回研究大会が、6月14日(土)・6月15日(日)の両日に、富山大学人間発達科学部及び富山国際会議場を会場に開催されました。参加者は、一般会員87人、学生会員12名、当日会員41名、韓国国際理解教育学会12名の152名でした。また、市民16名、富山大学・同志社女大学の学生24名及びスタッフ42名を加えると、参加者の総数は234名となりました。両日とも晴天に恵まれ、快適な学会活動を行なうことが出来たことは、大変幸運なことであったと思います。

第一日目(6月14日)には、午前中に分科会、午後に関開シンポジウム「学校の中の多文化共生の構築を目指して」が行なわれました。韓国国際理解教育学会の方々には、昼休みにお茶会に参加して頂き、お手前を体験して頂きました。夕刻には、市内の富山国際会議場に移動し、懇親会が行なわれました。懇親会に先立って行なわれた「清元の夕べ」では、清元延佳月さん(浄瑠璃)と松岡菜理佳さん(三味線)による清元「三社祭り」に、江戸文化の粋を十分に堪能して頂くことが出来ました。韓国の方が「韓国の伝統音楽パンソリのようだ」との感想を述べられていたことが、大変印象的でした。

また、第二日目(6月15日)には、午前中に分科会、午後に関特定課題研究「ユネスコの動向を踏まえた日本の国際理解教育－世界遺産教育を切り口にしたESD－」が行なわれました。当日の大学構内では、「アースデイとやま2008」の環境イベントが行なわれていました。そのため、「アースデイとやま2008」実行委員会と相互に後援しあい、特定課題研究を「アースデイとやま2008」の参加者にも公開致しました。

#### 学外有志・学生ボランティアの協力に感謝

第18回研究大会には、自由研究の部で国内から53題目、韓国国際理解教育学会及び中国から7題目の計60題目が発表されました。これはこれまでの大会の中で最高の発表数ではないかと思えます。本大会を機に、富山県に国際理解教育が根付くものと確信しました次第です。

分科会会場となった人間発達科学部の校舎は、昨年夏から改修を行ない、四月から利用可能となりました。リフォームしたばかりの真新しい校舎で、研究大会が開催できたことは、関係者として大変うれしく思っております。五月下旬になって各教室に視聴覚機器が取り付けられるなど、大会直前まで会場準備の目途が立たず、綱渡り状態でありましたことも、今となってはよい思い出となっています。

また、大会の準備や当日の運営に、学外の有志の方々や学生が多数、ボランティアとして参加し、グリーンの文字でJAIEと書かれたオレンジ色のTシャツを着て、献身的に活動してくれました。彼ら、彼女らの活動に対して、多くの大会参加者から賞賛の言葉を頂いております。私自身も、大変感謝しています。

最後に、日本全国、そして韓国、中国からご参加頂きました国際理解教育の研究者や実践者の皆様や、本大会にご支援・ご助成をお寄せ頂きました方々に心より御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。



オレンジ色のTシャツ姿でもてなした学生ボランティア

# 第18回研究大会 分科会報告

## 過去最高の発表数となった自由研究

第18回研究大会実行委員会

第18回研究大会の分科会が、6月14日(土)・6月15日(日)の午前、富山大学人間発達科学部で開催され、13分科会場で充実した発表と熱心な討論が展開されました。今年度は、自由研究発表の件数が60件に達するなど、これまでの大会の中で最大規模となりました。また、韓国や中国から7件の発表があるなど、本大会は国際学会としての性格を有することになりました。

6月15日に、日中韓教材開発のための分科会が特別に設

けられたことも、注目されるエポックです。この分科会は、昨年の札幌大会(第17回研究大会)に引き続いて開催された「日中韓教材開発ワークショップ」(2007年7月30・31日、ホテルKKR札幌)での参加者が中心となり、一年かけて開発された「日中韓相互理解のための教材」等がお披露目されました。

では、以下に、自由研究発表の題名と発表者を報告します。

### 大会分科会のプログラム

#### 第1日(6月14日) 第1分科会～第6分科会

##### ■ 第1分科会 会場 142講義室

司会 日本大学 渡部 淳, 倉敷芸術科学大学 黒田 明雄

- (1) 「生きる力」を育てる教育活動に関する一考察  
宮城県立仙台東高校 石森 広美
- (2) 私にもできる国際貢献「ワンコイン(500円)プロジェクト」の概要  
インドネシア教育振興会 窪木 靖信
- (3) 県立進学校におけるグローバル教育  
福岡県立福岡高校 鹿野 敬文
- (4) ワークショップ「巨大魚が現れた」を通じた中高生の学び  
広島なぎさ中学高校 野中 春樹
- (5) 日本における開発教育の運動の構造  
早稲田大学 近藤 牧子

##### ■ 第2分科会 会場 114講義室

司会 文教大学 今田 晃一, 上越教育大学 瀬戸 健

- (1) 多文化社会に生きる高校生の社会認識に関する一考察  
桃山学院大学 大野 順子
- (2) 若者の国境を越えた「出会い」を創り出してきたヨーロッパ市民  
神奈川県立麻生高校・首都大学東京 風巻 浩
- (3) 歴史教科書の国際比較調査  
筑波大学 柴田 政子
- (4) 地球化時代の国際教育の理論的・実践的課題  
(神戸大学) 川端 末人

##### ■ 第3分科会 会場 117講義室

司会 筑波大学 嶺井 明子, 共栄学園短期大学 山田 千明

- (1) 子どもの「社会力」を育成する国際理解教育の研究  
鹿児島大学院生・鹿児島市立西伊敷小学校 藤崎 隆博
- (2) 保育者養成と国際理解教育Ⅲ  
立教女学院短期大学 山中 美子
- (3) 映像リソースを活用した地球市民的資質の育み  
拓殖大学 石川 一喜
- (4) 日本におけるシティズンシップ教育の可能性  
同志社女子大学 藤原 孝章
- (5) ユネスコの「国際理解教育」とシティズンシップ教育  
筑波大学 嶺井 明子

##### ■ 第4分科会 会場 211講義室

司会 埼玉大学 桐谷 正信,

神戸市立六甲アイランド高校 高野 剛彦

- (1) 国際理解教育における「聴くこと」の意味  
聖心女子大学 横田 和子
- (2) Directions of multicultural education in Korea  
Yonsei University 韓 駿相 (Han, Zun-Sang)
- (3) コミュニケーション能力の再考  
上越教育大学 田島 弘司
- (4) The implication of the 'Kosian house' case for the multicultural education in Korea  
Yonsei University 韓 璉相 (Han, Jin-Sang)

##### ■ 第5分科会 会場 113講義室

司会 桜美林大学 高橋 順一, 東京女学館大学 上別府 隆男

- (1) 国際理解教育の射程として理解不可能性を位置づけることについての考察  
名古屋大学院生 市川 秀之
- (2) 音楽文化に対してよりグローバルな視点を持つための創作学習  
東京学芸大学附属竹早中学校 居城 勝彦
- (3) 日本人児童生徒がもつ先住民認識の問題  
京都ノートルダム女子大学 中山 京子
- (4) 国際理解教育において獲得した資質や能力の応用・発展に関する実証研究  
千葉市立打瀬中学校 青木 一
- (5) 国際理解教育の題材としての捕鯨  
桜美林大学 高橋 順一

##### ■ 第6分科会 会場 112講義室

司会 上越教育大学 釜田 聡, 近畿大学 服部 圭子

- (1) 在日コリアンと多文化教育  
京都橘大学 磯田 三津子
- (2) The Outcome and Future Task of Multi-Culture Education Intensive Program in 2007  
Yangji High School 白玉連 (Baik, Ok-Ryeon)
- (3) 日韓相互理解のための歴史教育における諸課題について  
上越教育大学 釜田 聡, 韓国教員大学校 許 信恵  
上越教育大学 梅野 正信, 上越教育大学名誉教授 二谷 貞夫
- (4) 多文化教育と韓国の多文化家庭子女の為の生活指導  
京畿道多文化教育センター 徐 宗男 (Suh, Chong-Nam)

## 第2日(6月15日) 第7分科会～第13分科会

### ■ 第7分科会 会場 113 講義室

司会 奈良教育大学 岩本 廣美, 福岡県立福岡高校 鹿野 敬文

- (1) 学校教育におけるESDの在り方について  
北海道教育庁 長浦 紀華
- (2) 校外学習とリンクしたESD・世界遺産教育授業の開発  
神戸市立楠高校 秋山 明之
- (3) ESDの理念にもとづく生徒会活動  
奈良教育大学附属中学校 植西 浩一
- (4) 「つながり」「多様性」「変化」をコンセプトにした国際理解教育の構築  
大竹市立栗谷中学校 小嶋 祐伺郎,  
奈良県立法隆寺国際高校 祐岡 武志  
奈良教育大学附属中学校 谷口 尚之  
奈良女子大学附属中等教育学校 南 美佐江
- (5) ASPnetを通じた日中歴史問題協同学習  
大阪教育大学附属高校池田校舎 (代表発表) 伊井 直比呂

### ■ 第8分科会 会場 114 講義室

司会 岐阜大学 寺島 隆吉, 東海学園大学 浅川 和也

- (1) 中学校英語教科書における国際理解の位置づけ  
明星中学高校 和田 俊彦
- (2) 地球市民の資質育成の視点からの大学英語授業実践  
関西学院大学 笠井 正隆
- (3) 国際理解教育における英語作文の指導について  
東京福祉大学 小嶋 薫
- (4) 児童の発達段階をふまえた小学校英語教育  
大妻女子大学 服部 孝彦

### ■ 第9分科会 会場 112 講義室

司会 同志社女子大学 藤原 孝章, 朝日大学 高橋 建司

- (1) 国家間対立の克服をめざす参加型「平和学習」  
大阪府立三島高校 松井 克行  
同志社女子大学 藤原 孝章
- (2) 平和教育における国家の捉え方に関する一考察  
兵庫教育大学連合大学院・東京都立小金井工業高校  
西尾 理
- (3) 地域から考える16世紀の日本と世界  
山口県立岩国高校 藤村 泰夫
- (4) 核戦争と子どもたち  
京都橘大学 井ノ口 貴史

### ■ 第10分科会 会場 117 講義室

司会 プール学院大学 岡崎 裕

- (1) モンゴル国における道徳教育の展開  
日本大学院生 バヤスガラン=オユンツェツェグ
- (2) 欧州におけるムスリムの教育課題と社会的支援  
国立教育政策研究所 丸山 英樹
- (3) 国際理解教育と地域教育の課題  
プール学院大学 岡崎 裕
- (4) ドイツ連邦共和国における移民の統合政策の現況と今後の展望  
鹿児島大学 竹内 宏
- (5) 文部科学省の「国際教育」のゆくえ  
東京女学館大学 上別府 隆男

### ■ 第11分科会 会場 142 講義室

司会 早稲田大学 山西 優二, 江東区立第七砂町小学校 川口 修

- (1) 文化人類学と国際理解教育  
文教大学 野呂田 純一
- (2) 博物館アウトリーチ教材の開発  
立命館守山中学校 木村 慶太  
香芝市立鎌田小学校 山田 幸生, 文教大学 手嶋 將博

マレーシア工科大学 クマラグル=ラマヤ  
文教大学 今田 晃一

- (3) 社会教育での国際理解教育の意義に関する一考察  
茨木市立葦原小学校 八代 健志
- (4) 博学連携ワークショップ型教員研修の在り方に関する考察  
文教大学 今田 晃一, 立命館守山中学校 木村 慶太  
東大阪市立盾津中学校 日比野 功, 文教大学 手嶋 將博
- (5) 第二言語話者の境界化回避に果たす移民学習の役割  
(財) 海外日系人協会 福山 文子

### ■ 第12分科会 会場 211 講義室

司会 聖心女子大学 永田 佳之, 広島経済大学 田中 泉

- (1) 留学生の宗教的多様性と日本の大学  
金沢大学 岸田 由美
- (2) 外国人児童に対する算数科教育の実践事例について  
太田市立旭小学校 鈴木 悦子  
太田市立太田小学校・東京外国語大学 末永 サンドラ輝美
- (3) アジア文明間のテキスト 変形と表現様式 差異  
Seoul Digital University 姜 益模 (Kang, Ick-Mo)
- (4) 環日本海諸国との小学校授業交流の試み  
上越教育大学 瀬戸 健

### ■ 第13分科会(日中韓教材開発) 会場 141 講義室

司会 北海道教育大学 大津 和子

- (1) 日韓中「三国ラーメン物語」実践に向けて  
文化女子大学 栗山 文弘
- (2) 文化批判としての多文化教育  
国民大校 韓 敬九 (HAN, Kyung-Koo)  
北大校 林 慶澤 (YIM, Kyung-Taek)
- (3) 日中韓の共通教材作成をめざして(子どもの生活文化から)  
上越教育大学 釜田 聡, 恵庭市立若草小学校 東峰 宏紀  
大阪府立三島高校 松井 克行
- (4) 「お土産のお返し」に関する日中共同授業  
草野 友子, 王 燕玲, 磯貝 純  
北京師範大学 姜 英敏
- (5) 日韓「移民」教材共同開発プロジェクト  
近畿大学 服部 圭子  
京都ノートルダム女子大学 中山 京子  
中央大学 森茂 岳雄  
神戸市立摩耶兵庫高校 志賀 照明

(文責: 田尻信壹)



# 第18回研究大会「公開シンポジウム」報告

## 学校の中の多文化共生の構築を目指して、熱心な議論が展開

聖心女子大学 永田 佳之

### 小学校、中学校、大学、地域の視点から4人が発表

日本国際理解教育学会第18回大会の初日、「学校の中の多文化共生の構築を目指して」というテーマのもとに公開シンポジウムが開かれた。全国の公立学校に在籍する外国人児童生徒数は約7万人にのぼり、うち日本語指導が必要な生徒数は前年度比で8%以上増加するなど、外国人児童生徒をめぐる諸問題に日本社会は直面している。このような現状からすると、今回のテーマ設定は国際理解教育にとって地域社会のかかえる喫緊の課題への応答であったと言える。こうした課題に対してパネリストは各々に長年の経験に裏打ちされた知見を備えた方々であり、多文化共生社会に向けたユニークな実践とその背景にある理論や思想に傾聴できる希少な機会となった。

まず中村則明氏（財団法人とやま国際センター）が外国人登録者数の伸び率が全国で第2位となっている富山県の現状を報告した上で、外国籍の子ども達を地域全体で支援する体制の必要性から生まれた「外国籍こどもサポートプロジェクト」を紹介し、地域の豊かさ（多様なリソース）としての外国籍住民や子ども達を捉える視座への転換を唱えた。次に所澤潤氏（群馬大学大学院）は、外国籍児童生徒の教育を標榜している群馬大学教職専門大学院カリキュラムを紹介し、多文化共生教育をフィールドワークで学ぶ学生達の姿が伝えられた。日系南米人児童生徒が多く学ぶ同県内で地元の高等教育機関が担う重要な役割を示したと言える。また成田喜一郎氏（東京学芸大学教職大学院）は東京学芸大学附属大泉中学校で全国に先駆けて実践されてきた帰国子女教育学級で氏自身が長年、子どもと向き合ってきた生徒達との経験を紹介し、「学校の中の多文化共生」を実践するには、教師自身が「コントロールする関係」から「コミュニケーション（対話）する関係」への転換を目指す必要性などについて説いた。最後に、宇土泰寛氏（相山女学園大学）は、市場原理に基づく競争主義によって教育現場でも構造的な排除の関係が生み出されつつあることに触れた後、様々な制約の中でも実践し続けてきた自身のユニークな実践（空き教室を利用した「地球子ども博物館」等）を紹介しながら、「機能的な学級モデル」でも「学級王国」でもない「共生のコミュニティ」のあり方を具体的に提示した。

### 現実を見据え、希望を示唆する内容であった討論

パネリストの上記のような話題を受け、フロアからの質疑を交えて後半の討議が展開された。司会は森茂岳雄氏（中央大学）と筆者が務めた。質問の中には現状認識に立つものが少なくなく、「そもそも同化する傾向にある学校に異文化を背景にもつ子どもを入れるのには無理があるのではないか」な

どのやや懐疑的な質問もみられた。しかし各パネリストの応答は現実を見据えながらも希望を示唆する内容であった。所澤氏は「私たちが一般に思っているほど日本の学校の制約はない」ことを強調し、宇土氏は「（例えば、外国籍の児童は勉強の水準を下げる要因ではなく、多くのことを学べるリソースとして捉えるような）眼差しひとつ変えれば、制約が可能性に変わる」ことを説いた。

ともあれ、実際に、現実の壁を乗り越えて理想を実現してきた方々がパネリストであっただけに、紹介された事例はいずれも突出した力量のなせる技であるとの印象を残したかもしれない。確かに個人の技量の問題としてではなく、社会全体の制度の問題として受けとめることが学会の課題であることを浮き彫りにしたのも、シンポジウムの成果であったという見方はできる。しかしこの点についても、富山県における住民を巻き込んだ地域レベルでの試みのような萌芽の事例がパネリストの話の中に見出されたことは強調しておきたい。

### シンポジウムで、地域での多文化共生の意義を確認

最後に私事で恐縮であるが、大学での国際理解教育の授業で必ず扱ってきたのが2001年の同時多発テロ事件と富山コーラン事件である。ともにグローバル化時代の国際理解教育のあり方が問われる事件であった。捨てられたコーランを発端に在日イスラム教徒の人々がデモ行進を行うという〈他者性〉と遭遇した富山の地で、事件後どのような対応がなされてきたのか、そんな関心を抱きながらの参加であった。

確かに、フロアからのコメントが示すように、現状は甘くない。しかし中村氏は、多文化共生プログラムが世直しの切っ掛けになればよいと述べ、多文化的状況が閉塞的な日本社会を変えていく契機が地域レベルでの試みに内包されていることを示してくれた。こうしたコメントに、私自身励まされ、富山でのシンポジウム開催という意義を再確認したしだいである。

大会後に富山での多文化共生に関する調査報告書を読み、コーラン事件後の行政や地域住民との協働は着実に実を結びつつあることへの想いを新たに。多文化社会の構築というあまりに大きな課題を前に、制約にとらわれるあまり、可能性を見過ごしてしまうのは、私自身の課題でもある。そんなことに気づかせてくれたシンポジウムでもあった。



多文化共生に向けて優れた実践を報告したパネリスト

# 第18回研究大会「特定課題研究」報告

## 「ユネスコの動向を踏まえた日本の国際理解教育」をテーマに実施

奈良教育大学 田渕 五十生

### 課題設定の経緯



世界遺産教育を切り口に議論が行われた（写真の人物は田渕氏）

日本の国際理解教育はユネスコの動向とは長い間懸隔していた。ユネスコ協同学校（ASP）加盟校が皆無、ないし休眠状態だったからである。過去、ユネスコは、「万人のための教育」、「平和の文化」、「人権の10年」など、人間の尊厳性の拡充に関わる教育を提唱してきた。その一方、90年代中頃から「世界遺産教育」（World Heritage Education：WHE）を、2005年からは「持続可能な開発のための教育」（略称「ESD」Education for Sustainable Development）へ取り組みを開始している。けれども、その動向は、日本の教育現場には浸透してこなかった。

大会2日目（6月15日）の午後、「ユネスコの動向を踏まえた日本の国際理解教育—世界遺産教育を切り口としたESD—」という課題研究が設けられた。「ESD」へのツールとして「WHE」を捉え直し、その両者の教育理論と実践のあり方について協議しようというのが、「課題研究」の狙いであった。

### シンポジウムの概略について

シンポジウムは、田渕五十生（奈良教育大学）、小嶋祐何郎会員（広島県大竹市立栗谷中学校）の司会の元に行われた。

#### ①ユネスコの動向

小林亮会員（玉川大学）から、近年のユネスコの動向と、それに応える欧州での先進的な取り組みについて報告を受けた。EU諸国の「ユネスコ協同学校」（ASPプロジェクト）で「バルト海プロジェクト」（Baltic Sea Project）、「青きドナウ川プロジェクト」（Blue Danube River Project）は、日本のASP活動に示唆を与えるものである。そこでは深刻な環境問題を切り口にして、諸国間の相互依存関係を確認し、同時にそれぞれの国の歴史や文化の多様性に気づかせる国際的な実践が展開されている。

#### ②「ESDカレンダー」の実践報告

学校行事や日常のカリキュラムを「ESD」の視点から捉え直している東京都江東区立東雲小学校の手島利夫校長から、「ESDカレンダー」による実践報告を受けた。東雲小学校では、「ESD」を「新たに取り組むべき教育内容」としてではなく、従来のカリキュラムを、「人権・民主主義」、「環境」、「多文化理解」、「国際的な協力」の4つのキーワード

で見直し、それらを連携させた年間の「カリキュラム・カレンダー」を作成して、「学習者主体」の実践を行っている。要諦は、断片的な学習内容にいか「つながり」を持たせるか「学習の総合性」を保障することである。「ESD」は決して新奇なものではなく、日常のカリキュラムの中に存している経緯が力説された。

#### ③地域遺産・世界遺産から迫る「ESD」

「ESD」に迫る切り口として、全市内の小中学校の「総合的な学習の時間」を使用し、「世界遺産学習」に取り組んでいるが奈良市である。その推進者である奈良市教育委員会の中澤静男指導主事から、「地域へのアイデンティティー」を育むために、ボランティアガイドという地域の教育力に依拠した実践が報告された。中澤は、「世界遺産のない地域でも、将来に残したいわが町の文化遺産、自然景観はという問い掛けで、世界遺産学習は地域学習として展開可能だ」と言う。肯綮に当たる指摘である。

#### ④「海女を無形世界遺産に」

韓国の済州大学のYOO, Chul In教授から固定観念を崩される提案があった。それは、三重県の英虞湾と済州島の海女たちの自然に依拠した漁法こそ「持続可能な漁業であり、日韓でユネスコの無形世界遺産に登録を働きかけよう」というものであった。

その発言に絡めて、指定討論者の伊井直比呂会員（大阪教育大学附属高校池田校舎）から、学習課題そのものの国際性のみならず、同一学習課題を複数国の学習者が多様な視点から学習する「国際性」にユネスコ協同学校実践のメリットがあるとの指摘を受けた。

### 全体討論と今後の展望

通訳の関係上、シンポジストの発表に終始して、全体協議の時間が十分取れなかった。その中で論議された一つは、「ESD」を文科省が「持続発展教育」と言い換えていることへの対応である。「名は体を呈す」。やはり「ワーディング」への評価は慎重であらねばならないだろう。



パネリストの発表に耳を傾ける参加者たち

## 第18回研究大会 清元の夕べ・茶会

### 音楽の自由

～日本国際理解教育学会研究大会に参加して～

音楽博士 清元 延佳月

清元は江戸時代の化政期、当時の文化の中心地である江戸に興った芸能です。歌舞伎の伴奏音楽として発展したため、今日に伝わる曲も歌舞伎舞踊の曲が大半です。

日本の古典芸能音楽を一本の大樹に喩えるなら、清元は末端の枝葉に位置します。根や幹に該当する声明や能などの先行芸能の旨みを受け継ぎつつ、時代の風を取り入れて葉を広げた比較的新しい音曲と言えるでしょう。

今回は国際学会という国の垣根を越えた場で、皆様に清元をどのように受け取っていただけるのか大変興味を持って演奏させていただきました。歌舞伎や舞踊から離れて単に曲のみを演奏することを素演奏と言いますが、仮に日本国内で素演奏の会があっても、見識や興味のない人が視聴者である場合には退屈と思われても仕方ありません。一分の漫談や三分のビジュアル付きポップスが楽しめる今日です。ましてや他の言語圏の方々が聴かれたならば歌詞の意味が伝わらずなおさら退屈ではないか、と心配いたしました。まず演奏中、しっかりと聴いて下さる様子が見受けられ感動いたしました。演奏後にうかがった皆様のコメントからもその関心の高さが伝わり、音楽の自由さと言いますか、言語や文化にとらわれない音楽の素晴らしさをあらためて認識いたしました。

仮に我々がイタリアオペラアリアを聴いたとして、その内容がわからなくても音楽は楽しめるのですから考えてみれば当たり前のことなのですが、普段、歌舞伎や舞踊会といった専門的な世界でのみ演奏する私達にとっては、見落としがちで却って新鮮な認識でした。

皆様からのお声の中に、隠れた面白さを紹介することの難しさをご指摘いただくコメントがありました。当時の通俗的な表現や隠語、漢詩や歴史を知っていなければ気付かない面白さが歌詞の随所に隠れています。そういった「知る人ぞ知る」面白さの紹介も、演奏者が工夫すべき課題であるのかもしれない、と省みる機会になりました。



清元「三社祭」を演奏する清元延佳月さん（左）と松岡菜理佳さん

### 一期一会の国際理解

～日本国際理解教育学会での茶会を終えて～

武者小路千家自楽会 昼川 貴洋



韓国からの参加者を前にお茶の点て方を披露

6月14、15両日、日本国際理解教育学会 第18回研究大会が富山大学五福キャンパスにて開催されました。外国から大勢の先生方がお見えになる本学会。この機会に是非日本文化に親しんで頂き、学会自体を国際交流、理解の場としようという田尻先生のお考えの下、14日の昼食後の時間に3階会議室をお借りして、海外の先生方向けの歓迎茶会を開催致しました。

さて、準備も無事終え、満を持して迎えた当日。少々緊張しつつ着物姿でお待ちしていた私達に、先生方は最初から笑顔で話しかけて下さり、お茶会は和やかな雰囲気の中に始まりました。私達も、はるばる日本までおいで下さった先生方のために、茶道の重要な心構えである、今日の前にいるお客様をおもてなしすることに全力を尽くす気持ち＝一期一会の精神を胸に、一服一服大切に薄茶を点てさせて頂きました。そんな私達の心が通じたのでしょうか。先生方も私達がお茶を点てる姿を真剣にご覧下さいました。「日本式の正式なお茶の飲み方を教えてほしい」という嬉しいお声も賜り、通訳の方にお手伝い頂いてご紹介致す一方で、「韓国ではお茶に塩を入れますが、塩はないのですか？」といったお声も賜り、私達も大変興味深く勉強になりました。

そして一通りお茶をお召し上がり頂いた後は、ご自身でお茶を点ててみたいというご要望にお応えして、急遽お点前教室を開催し、是非持ち帰りたいとご要望のあった当日使用したお茶碗については、綺麗に洗った上でご希望の先生方に差し上げお喜び頂きました。

記念の写真撮影後、お別れの際には、大勢の先生方から丁寧に感謝のお言葉を頂戴し、韓国に来た時にはぜひご連絡下さいと名刺を戴くなど、恐縮ながらも、先生方にはとてもお喜び頂けたことで、本茶会は大成功のうちに終了致しました。

最後になりましたが、企画準備段階から本茶会を支えて下さった大勢の皆様、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

## 第18回研究大会 参加記

### 韓先生の笑顔にほっとして

～韓国からの学会参加者との連絡・調整～

目白大学 中山 博夫

「アンニョンハセヨ」、韓敬九(ハン・キュンク)韓国国際理解教育学会新会長先生の明るい笑顔でのあいさつに、正直ほっといたしました。これは、12名の韓国からの学会参加者が無事に富山に到着された時の偽らざる思いです。

学会の事務局の仕事として、韓国学会との連絡・調整をさせていただいています。昨年度は、釜山から約100キロ西に位置する統営(トンヨン)で韓国の学会があり、日本からの参加者と韓国側との間に入って、連絡・調整をさせていただきました。

今回は、韓国からの参加者をお迎えしたわけです。気持ちよく富山で過ごせるようにしたいという思いでした。3月下旬に、多田会長の富山大会への招待状を発送いたしました。その後は、メールで韓先生と連絡をとりあうことになりました。特定課題研究の報告者をお願いしたり、自由研究発表の発表者を募ったりということを行いました。

自由研究発表の申し込みも7名の先生方からありました。でも、そこからが心配の始まりでした。発表抄録の原稿がなかなか届かないのです。韓先生に何度もメールを送ってお願いをいたしました。韓先生からは丁寧な返信を頂くのですが、原稿はなかなか届かない状態でした。韓先生は、私と発表者の間に入られて、きっと大変な思いをされたのではないのでしょうか。でも、なんとか発表抄録の印刷に間に合わせることができました。感謝でした。

そして、研究大会ということになるのですが、韓国から富山へのアクセスは、東京や大阪に比べて不便です。韓国から参加の先生方は、ちゃんとお出でいただけるのだろうかとお心配だったのでした。

でも、これは全くの杞憂でした。富山に到着された韓先生の笑顔には、本当にほっとさせられました。11月には、今度は韓国の大田(テジョン)で学会があります。日本の会員みなさん、ぜひ参加してみませんか。



韓国国際理解教育学会からの参加者(後列左から2人目が韓先生:編集提供)

### 学会としてESDをどう捉えていくかに期待

拓殖大学国際開発教育センター 石川 一喜



白熱した議論が行なわれた分科会(編集提供)

昨年の第17回大会へは仕事の関係で参加できず、2年ぶりとなる今回の参加は個人的に非常に楽しみとしていた。それと同時に、自由研究発表もし、今現在、自分が抱えている思いや課題を学会の場で提示し、どのような反応が返ってくるのか問うてみたいとの思いもあった。

今回、私が発表したのは、現代の地球社会が抱えるテーマ群を全20回にわたって取り上げる「地球データマップ」というNHKの番組を素材とするカリキュラム開発の試みである。網羅的なテーマ群は、各回を有機的につなげ、構成していくことでESD実践としての性質を帯びてくる。いまだ実体の定まらないESDを現場で意義あるものとしていくため、世界の現状認識だけではなく、自分の内面へも常に問いかけ、「外へ向かう旅」と「内へ向かう旅」を繰り返して“自分の物語”を紡いでいく。それがESDを本質的なものにする、とした。私のこの投げかけがどのように響いたのか、質疑応答の時間を十分に取れなかったため、詳細に知ることはできなかったが、ありがたいことに何人かの先生方に共感していただくことができた。

私事のため2日目は参加できず、ESD関連の発表者が多かった第7分科会や特定課題研究に参加できなかったのは甚だ残念であったが、各学会員が意欲的に様々な取り組みへ挑んでいることは窺い知ることができた。ESDという新たな概念の評価は別として、国際理解教育がESDというひとつの到着点に帰している今、本学会はこれに対して回答していく義務を背負っている。持続可能性は社会、文化、経済などの側面でも語られなくてはいけないのに、「環境」の側面で語られることが多い故、国際理解教育として、どんな実践ができ、学習者とともにどのような未来の物語を語っていけるのか、試行錯誤しなくてはならない。各学会員の試行錯誤の末の成果を共有できると思うと、また来年の学会が今から楽しみである。



## 三つの絡み合いから生まれる学び

聖心女子大学 横田 和子

大会を通して、国際理解教育とESD、また世界遺産教育(WHE)との関係についての様々な発見や疑問が生まれた。小嶋祐伺郎氏らの発表は、この三つのキーワードの構造を具体的な実践の中で捉えようとする試みであった。特定課題研究「ユネスコの動向を踏まえた日本の国際理解教育」では、地域での様々な事例や課題について知ることができた。YooChul-In氏が提供された、韓国と日本の海女から学ぶESDというテーマからは、無形文化遺産から学ぶダイナミックな魅力を感じた。奈良市教育委員会の中澤静男氏はカリキュラム例の中に、狂言や能、シルクロードの音楽等を挙げていた。個人的に、世界遺産教育の事例が有形の遺産に偏りがちなイメージを持っていたが、口承文化や音楽など、無形遺産を生かした実践についても今後更に深く知りたく思った。さて、以前から気になっていたのだが、メディアや観光産業の中では「世界遺産」ということばだけが一人歩きして、人々の中にある種のブランド志向を植えつけているように感じることもある。ひねくれ者の私はそうした言説に触れると、人間のからだもことばも、日常の暮らしも、誰に認めてもらえなくても世界遺産ではないか、などと嘯きたくなってしまおうのだが、今回大会に参加し、おそらくWHEとESDが切り結ぶことの意義は、その遺産自体の学習が目的なのではないこと、今日の前にある対象を大事に保護するというよりもむしろ、そういった遺産をきっかけに、過去と未来をつなぐ「現在」を意識し、あるいは空間的・地理的に多様な文化の連なりの中にある「ここ」を意識し、現在ある私たちの文化を捉え直すきっかけとすること、自分たちの文化の創造を学ぶことにあるのではないかと認識を新たにしたい。WHEとESDとが絡み合いながら、今後の国際理解教育がより有機的、全体的な学びへと展開していくために、更なる検討の必要性を感じた。



ESD・世界遺産教育をテーマにした特定課題研究 (編集提供)

## 第11分科会への参加を中心に

立命館守山中学校・高等学校 木村慶太

日本国際理解教育学会研究大会への参加は、今回で4度目となる。参加するたびに新しい発見とヒントをいただくことができるため、毎年楽しみにさせていただいている。今年も素晴らしい「学びの場」を与えていただいたことに心より謝意を述べたい。

第11分科会は、小中学校・大学の教員及び博物館関係者、さらには海外日系人協会の方など様々な立場からの参加をいただくことができたため、多角的な視点での意見交換が可能となり、大変有意義な分科会となった。

野呂田純一氏は、文化人類学の研究成果を国際理解教育における教育資源として活用する際、博物館がその媒介となる可能性と活用の留意点について報告された。アフリカのカリンバを例とした、時系列的な文化変容とグローバリゼーションが与える影響についての報告は、国立民族学博物館において博学連携プロジェクトに参加している私にとって得るものの多い内容であった。

八代健志氏は、居城勝彦・中山京子両氏の事例を先行実践として分析・考察し、学校現場ではなく地域の教育施設で、夜間、小学生を対象としてアウトリーチ教材を活用した実践を報告された。「人権」をキーワードとしたその実践には、象牙の塔からの報告にはない熱さと厚みがあり胸を打たれた。「反差別」の活動を中心とした地域行政の取組の中に、国際理解教育の視点が取り入れられていくことは、重要かつ喜ばしいことであると感じた。

福山文子氏は、移民学習を、現在学校現場において大きな課題となっている日系人を中心とした渡日の児童生徒への境界化を回避するための効果的な学びのひとつとしてとりあげておられた。私自身もこれまでの学級経営の中で、第二言語話者に対して、どのようにアイデンティティを確立しセルフエスティームを育むことができるのかと思索し続けてきた。

今回の報告から得たヒントをもとに自分なりの移民学習に挑んでみたいと考えている。また、私たちの報告にも多くの示唆に富む意見や感想をいただくことができた。

違う立場の参加者による報告を聞き、自分の実践に対しても意見をいただき、次のステップへのアイデアと活力を得たことは、ささやかではあるが私自身の中で「知の統合」が行われたということではないだろうか。

参加しヒントを得るたびに自身の実践に深みが増していく。今後とも、学会を通してそのように成長していく自分でありたいと思っている。

## 第4分科会の司会を行なったの感想

神戸市立六甲アイランド高校 高野 剛彦

本分科会（第4分科会）では、(1) 国際理解教育における「聴くこと」の意味（発表者：聖心女子大学 横田和子）、(2) Directions of multicultural education in Korea（韓国 Yonsei 大学 韓駿相）、(3) コミュニケーション能力の再考（上越教育大学 田島弘司）、(4) The implication of 'Kosian House' case for the multicultural education in Korea（韓国 Yonsei 大学 韓璣相）の4氏による発表が行われた。韓国からの二氏の発表はハングルで行われ、学生による同時通訳がついた。

分科会を司会しながら、改めて国際理解教育の広がりや深まりを痛感した。第1発表者：横田氏の発表は国際理解教育と音楽教育との接点というだけでなく、ホリスティック教育との関連も感じさせるものであった。「近代の教育において、「聴く」という行為は、受動的な行為と見なされがちであった」という氏の指摘は、現場の教員として思わずはっとさせられずにはいられない。書くこと、話すことという認知的な表現方法を主流としてきた我々は、そうした自己表現を苦手とする児童・生徒にどのような手立てを用意できてきたであろうか。反省することしきりであった。

第4発表者：田島氏の発表も刺激的であった。最新の脳科学の成果を活用してコミュニケーション能力の育成方法を考えようという、新しい分野を積極的に開拓されていこうとしている姿勢に感服した。将来的にはコミュニケーション能力を構成要素化し、どの要素をどのような方法で育成できるかといったことが分かるようになるかもしれない。

韓国からのお二人の発表は、韓国における多文化教育の現状と課題を分かりやすく伝えていただいた。韓駿相氏の発表が韓国における多文化教育の歴史的経緯と現状を、韓璣相の発表は「コシアン・ハウス」をケースとした事例研究であった。印象的だったのは、韓国において多文化教育という際には、北朝鮮文化との共生を含むというお話だった。ただ全体として同化教育の域にとどまっている感否めない。何より残念だったのは、聴衆が少なく質問もほとんどなかったことである。せっかく遠路はるばる来られているだけに、参加者を増やす手立てを考えていかねばならないだろう。



全国から富山大に集まった会員（大会受付の風景：編集提供）

## 富山研究大会をふりかえって

神戸市立楠高等学校 秋山 明之

私がみんぱくのセミナーで知り合った縁で、国際理解教育学会に加入したのが昨年末のことでした。そして富山大会が初の研究大会参加となりました。一地方公務員（高校教員）である私には、学会参加したことで神戸とは違う、地域文化やさまざまなものにふれる経験ができました。

異文化と接したとき、目に見えるモノを通してその背後にある伝統や思想を見ようとする姿勢は、みんぱくのセミナーの中心課題だったように思います。今回も、研究大会の内容もさることながら、目で見て触れてみたモノを通して富山についての認識が大きく変わりました。町も大学もその佇まいのうちに伝統に根ざした「富山らしさ」があるように感じました。

まず、寝ぼけ眼で早朝に降り立った富山駅。改札口の上には「歓迎・国際理解教育学会富山大会」の掲示が。この掲示ができるまでの背景にはおそらく実行委員会の方々の苦労があったことと推察しますが、十分にその甲斐はあったと思います。「ついに来たぞ！」と、目が覚める思いでした。

富山市内は路面電車が残り、さらにJR西日本の富山港線をライトレールとして再生するなどユニークな取り組みが行われています。それを支える「コンパクトシティ構想」という理念が現地に足を運んで乗り降りしているうちに実感とともに理解できました。岩瀬浜では伝統的な商家に感心し、また、そこそこにロシア語表記があることにもおどろきました。連綿と日本海貿易の拠点として機能する港湾都市としての富山を感じました。

富山大学内では環境問題を取りあげたイベントが、また、すぐ隣の県営野球場では野球の独立リーグの試合が行われていました。どちらも時流に乗った今風の行事ではありますが、きっとそれらにも富山らしさが反映されているでしょう。

研究大会においては、内容以前に、女性の参加者が多いのが新鮮でした。今まで参加した社会系の教科教育の学会は基本「男所帯」という感じでしたので。自分の発表もシンポジウムも緊張のうちにあっという間に終わってしまった感じです。

学会参加を通じて、路面電車で大学やレセプション会場に移動し、学び、主催者の心づくしのイベントを楽しみ、岩瀬浜の商家を訪ね……という行程は、楽しい経験でありました。「異文化を体験する」という視点に立てば国内での移動でも次々と発見があり楽しいものです。それはまた自分の「異文化を見る眼（センス）」を試されているような緊張感を伴うものでもありました。学会のおかげで貴重な経験ができました。ありがとうございました。

## 博学連携教員研修ワークショップ2008 in みんぱく

### 「博物館を活用した国際理解教育」 ワークショップに122名が参加

日本国際理解教育学会副会長／北海道教育大学 大津 和子



民族学博物館研修室いっぱいの参加者（午前の全体会）

#### ■ 4回目を迎えた博学連携教員研修ワークショップ

博学連携教員研修ワークショップが、8月5日（火）に大阪吹田市の万博記念公園にある国立民族学博物館で開催されました。年々参加者数が増え、4回目の今年是一般参加者122名、館内外のスタッフ30名、事務方5名という盛況ぶりでした。

当日午前は全体会で、国立民族学博物館館長・松園万亀雄氏、日本国際理解学会会長・多田孝志氏の開会挨拶が始まりました。続いて、大津和子（北海道教育大学）による基調講演「国際理解教育とフィールドワーカーモノに出会う、人に出会う」では、教材づくりの視点から、現地フィールドワークおよび博物館フィールドワークを比較検討しつつ、両者の相互補完的な意義について、具体的な事例を交えながら語られました。

■ 5つの多彩なワークショップが準備された午後の分科会  
午後には、次の5つのワークショップが行われました。

◇みんぱくを使ったカリキュラム開発（文教大学：今田晃一，立命館守山中学校：木村慶太，東大阪市教育委員会：日比野功，香芝市立鎌田小学校：山田幸生，国立歴史民俗博物館：佐藤優香，国立民族学博物館：林勲男）

アウトリーチ教材であるみんぱくを活用した実践報告がなされたのち、教育現場でどう活用するかに焦点を絞って、みんぱくの開発に携わってきた佐藤氏のコメントも加えて、アイデアを出し合いました。みんぱくの間接的利用という観点からは、「日本版みんぱく」をつくろうという活動が取り組みましたが、これは実際にマレーシアの小学校で実践される予定です。みんぱくの海外への飛躍です。

◇身近な素材から音が生まれる時（東京学芸大学附属竹早中学校：居城勝彦，茨木市立葦原小学校：八代健志，国立民族学博物館：福岡正太）

ガムラン音楽の仕組みと実際の演奏指導を福岡先生から受けてから、参加者が実際にガムラン楽器を奏でました。そして会場に戻って、竹筒や棒など身近な素材を使って自

分の好きな音を見つけ、仲間の音と重ねたり連ねたりしながら音楽を創りだす瞬間を楽しみました。教員自らが楽しむことがさまざまなアイデアを生み出し、優れた授業実践を育みうることを実感したワークショップでした。

◇先住民とわたし（中央大学：森茂岳雄，京都ノートルダム女子大学：中山京子，国立民族学博物館：岸上伸啓・佐々木利和）

参加者である「わたし」が先住民に対してもっているイメージが、アクティビティを通して引き出されました。それらは、私たちが幼時から馴染んできた映画や歌などを通じて形成されてきたものであるということが検証されたのち、岸上先生と佐々木先生から、展示を見ながらイヌイトとアイヌの実像についての講義を受けました。私たちがいかに無意識のうちにステレオタイプ的なイメージを抱いているかを実感したワークショップでした。

◇ひとかけらの板チョコから（同志社中学校：織田雪江，国立民族学博物館：八杉佳穂）

『チョコレート文化誌』の著者である八杉先生との協働で作成した授業実践が発表されました。子どもたちの大好きなチョコレートの誕生と歴史を学ぶとともに、カカオの生産国の子どもの暮らしを知り、チョコレートを通して自分と世界とのつながりに気付かせる実践でした。より公正な社会をめざす一つの試みであるフェアトレードチョコレートがことのほか美味でした。

◇私にとってのESD（同志社女子大学：藤原孝章，上田信行，国立民族学博物館：白川千尋）

博物館の文化資源を活用して「持続可能な社会」を考えました。南先生の講義を聞いた後、展示資料を見学して写真を撮ってプリントアウトし、「私の考える持続可能な社会」のイメージをキューブに表現して、最後に全員がそれらを使って発表しました。暮らしの持続可能性に、世界の諸民族がどのように向き合ってきたのかを探るとともに、「私の考える持続可能な社会」をイメージするというユニークなワークショップになりました。

ワークショップ終了後、当日の映像がスクリーンに映し出され、同時進行のため参加できなかった他のワークショップの様子を垣間みることができました。多田孝志学会長からの講評のあと、森茂岳雄氏（中央大学）の閉会挨拶で研修の幕を閉じました。



竹筒を使って自分の音探しに挑戦（午後のワークショップ）

# 2007(平成19)年度総会報告

## 2007(平成19)年度事業報告および収支決算について

### 1. 第18回研究大会開催

2008年度の研究大会(実行委員長 富山大学田尻信壹教授)は富山大学で6月14日(土)・15日(日)の両日にわたって、232名の参加者を得て、盛会に行なわれた。今大会は13分科会、過去最多の60の自由研究発表があった。

期間中に総会が開かれ、2007年度事業、決算報告と2008年度の事業計画、予算案が承認された。

### 2. 各委員会報告

#### 1) 研究委員会(森茂岳雄委員長)

2007年度～2009年度の共通の研究テーマを「共生社会の構築と国際理解教育」とし、以下の三つの研究課題で研究が推進されている。

- (1) ユネスコの世界遺産教育と日本の国際理解教育(担当理事: 田淵五十生)
- (2) ことばと国際理解教育(担当理事: 山西優二)
- (3) 国際理解教育とグローバル時代のシティズンシップ(担当理事: 嶺井明子)

初年度は、田淵理事を筆頭に、今年2月23日(土)、本学会の教育実践研修会を兼ね、奈良市世界遺産学習実践研究会、及び奈良教育大学ユネスコ協同学校教育実践研究会と共催で「世界遺産から持続可能な社会の実現へ」と題して、奈良教育大学を会場に公開研究会が行われた。

#### 2) 紀要編集委員会(藤原孝章委員長)

紀要「国際理解教育」14号に向けての論文募集、編集作業がおこなわれ、本研究大会での刊行にいたった。

#### 3) 実践研修会・各プロジェクトについて

・国際理解教育実践研修(田尻信壹理事)

富山大学で行われた国際理解教育実践研修会の報告。様々な交流ができた。76名の参加があった。

・国際理解教育実践研修(田淵五十生・今田晃一理事)

国際理解教育実践研修会を奈良市の世界遺産教育と奈良教育大学の3者合同で行った。奈良市は全小学校と6校の中学校で総合的な学習の時間で自分たちの地域学習であり、世界遺産学習に取り組んでいる。研修会は、210名の参加があった。

・国立民族学博物館との共同事業(森茂岳雄理事)

昨年3年目で、30周年記念で2日にわたって実施した。民博の方もよい取り組みとしてとらえている。この会を通して新入会員も増えている。

### 3. 韓国国際理解教育学会およびワークショップ(藤原孝章理事)

第8回韓国国際理解教育学会がキョンサン大学トンヨンキャンパスにて開催され(11月10日～11日)、日本からも13名の会員が参加し、7名の会員が自由研究発表を行った。シンポジウムでは藤原孝章常任理事が、日中韓ワークショップでは多田孝志会長が日本の国際理解教育の現状と課題について発表された。

### 4. 公文国際奨学財団夏期教員研修会派遣

東京学芸大学附属竹早中学校教諭居城勝彦会員と広島県大竹市立栗谷中学校教諭小嶋祐何郎会員を推薦、派遣した。

### 5. 理事会開催

(理事会) 2007年7月27日 札幌、2007年12月2日 東京  
(常任理事会) 2007年9月22日 東京、2007年3月8日 東京

### 6. 事務局報告

1) 会報発行 第31号(2007年10月)、第32号(2008年3月)

2) 後援名義

・2007年度国際教育セミナー(主催: 財団法人大阪府国際交流財団)

・夏期教員ワークショップ(主催: 武蔵野市国際交流協会)

3) 会員数(2008年3月末)

554名(正会員453名、学生会員94名、団体会員7)

## 平成19年度 日本国際理解教育学会収支決算書

平成19年4月1日から平成20年3月31日まで

### I. 収入の部

科目	18年度決算額	19年度予算額	19年度決算額	増減	備考
入会金	66,000	120,000	114,000	△6,000	3,000×38名
年会費	3,687,000	3,100,000	3,644,500	544,500	正会員374名、学生会員52名、団体会員6
助成金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	0	公文国際奨学財団より
雑収入	346,077	250,000	253,898	3,898	委員会前年度残金、紀要販売等
当期収入合計(A)	5,099,077	4,470,000	5,012,398	542,398	
前期繰越収支差額	330,441	660,046	609,586	△50,460	※18年度決算分
収入合計(B)	5,429,518	5,130,046	5,621,984	491,938	

### II. 支出の部

科目	18年度決算額	19年度予算額	19年度決算額	増減	備考
1. 事業費	3,648,809	3,540,000	3,275,455	264,545	
大会運営補助費	400,000	400,000	400,000	0	20年度大会用
紀要委員会費	320,000	270,000	161,930	108,070	14号編集費
紀要刊行費	1,100,000	1,100,000	1,100,000	0	13号刊行費
会報刊行費	320,460	300,000	259,754	40,246	Vol. 31, 32刊行費
理事会費	820,179	520,000	506,880	13,120	
研究委員会費	430,000	600,000	500,000	100,000	
国際理解教育実践研修会費	138,950	200,000	192,021	7,979	
国立民族学博物館との共同事業		100,000	98,205	1,795	
国際交流費	119,220	50,000	56,665	△6,665	
2. 管理費	1,120,663	1,240,000	853,244	386,756	
事務局経費	200,000	250,000	28,199	221,801	
人件費	180,000	240,000	202,640	37,360	事務アルバイト代
通信費	490,364	390,000	262,123	127,877	郵送費
設備・備品費	97,020	140,000	120,741	19,259	パソコン、プリンタ
消耗品費	16,809	40,000	50,632	△10,632	プリンタ用インク、宛名ラベル代
会議費	23,580	30,000	24,179	5,821	会場借料
旅費交通費	84,210	60,000	77,600	△17,600	
印刷製本費	23,100	80,000	79,275	725	封筒印刷代
雑費	5,580	10,000	7,855	2,145	振込手数料
3. 予備費	0	50,000	0	50,000	
当期支出合計(C)	4,769,472	4,830,000	4,128,699	701,301	
当期支出差額(A)-(C)	329,605	-360,000	883,699	1,243,699	
次期繰越収支差額(B)-(C)	660,046	300,046	1,493,285	1,193,239	

# 2008年度（平成20年度）事業計画

## 2008（平成20）年度事業計画

### 1. 全体方針

- ① 会員に資する学会運営と学会組織の改善
- ② 21世紀の教育的課題に対応した研究・実践活動の展開
- ③ 海外の関連学会・団体、国内の関連組織との連携の発展
- ④ 学会の財政の安定化に向けて、会員の拡大と会費納入の促進

③日中韓相互理解のための教材開発  
 成果発表 会場 富山大学 6月15日（日）

### 2. 各委員会等事業計画

#### 1) 研究委員会

優れた教育実践者・研究者が参集している本学会の特色を生かし、国際理解教育に関する理論的・実践的な研究課題を追究していく。

#### 2) 紀要編集委員会

- ① 紀要「国際理解教育」VOL. 15の編集と刊行
- ② 会員からの論文投稿募集
- ③ 15号から特集（世界遺産教育）を企画
- ④ 学会賞について

#### 3) 各事業

- ① 国立民族学博物館との共同事業  
 博学連携教員研修ワークショップ 2008—博物館を活用した国際理解教育—  
 会場 国立民族学博物館 8月5日（火）
- ② 国際理解教育実践研修  
 国際理解教育の実践方法（カリキュラム開発、学習方法、教材開発等）についての研修会の開催予定  
 東京都板橋区立志村小学校「鯨をテーマとした国際理解教育の実践」2008年10月24日  
 香芝市「博物館を活用した国際理解教育」（仮称）2009年2月

### 3. 2009年度（平成21年度）第19回 研究大会への準備

開催日時 2009年6月13日（土）・14日（日）  
 開催会場 同志社女子大学（京田辺市）  
 実行委員長 藤原孝章同志社女子大学教授

（日本国際理解教育学会事務局）

### ニュースレター投稿のお願い

ニュースレターでは、ひろく会員の皆様の活動をご紹介するために、「会員だより」の欄を設けています。「会員だより」では、以下の条件で、会員の投稿を御願ひしています。

内容：現在の研究テーマや活動について、国際理解教育に関する考え等  
 分量：本文800字以内、写真（JPEG形式、デジカメ写真）1枚

投稿をご希望する場合は、お名前、所属を明記の上、事前に以下までメールでご連絡下さい。あらためて執筆のご依頼をさせていただきます。投稿希望者が多数の場合には、調整させていただきます。

連絡先 田尻信壹（富山大学） stjiri@edu.u-toyama.ac.jp

## 平成20年度 日本国際理解教育学会予算書

平成20年4月1日から平成21年3月31日まで

### I. 収入の部

科目	19年度決算額	20年度予算額	備考
入会金	114,000	120,000	3,000×40名
年会費	3,644,500	3,456,000	のべ442名
助成金	1,000,000	1,000,000	公文国際奨学財団より
雑収入	253,898	250,000	委員会前年度残金、紀要販売等
当期収入合計(A)	5,012,398	4,826,000	
前期繰越収支差額	609,586	1,493,285	
収入合計(B)	5,621,984	6,319,285	

### II. 支出の部

科目	19年度決算額	20年度予算額	備考
1. 事業費	3,275,455	3,530,000	
大会運営補助費	400,000	400,000	21年度大会用
紀要委員会費	161,930	220,000	15号編集費
紀要刊行費	1,100,000	1,100,000	14号刊行費
会報刊行費	259,754	300,000	Vol. 33, 34刊行費
理事会費	506,880	520,000	
研究委員会費	500,000	600,000	
国際理解教育実践研修会費	192,021	200,000	
国立民族学博物館との共同事業	98,205	100,000	
国際交流費	56,665	60,000	
学会賞	—	30,000	
2. 管理費	853,244	880,000	
事務局経費	28,199	100,000	学会HPデータベース改訂費用
人件費	202,640	240,000	事務アルバイト代
通信費	262,123	270,000	郵送費
設備・備品費	120,741	10,000	
消耗品費	50,632	60,000	プリンタ用インク、宛名ラベル代
会議費	24,179	30,000	会場借料
旅費交通費	77,600	80,000	
印刷製本費	79,275	80,000	封筒印刷代
雑費	7,855	10,000	振込手数料
3. 予備費	0	100,000	
当期支出合計(C)	4,128,699	4,510,000	
当期支出差額(A)-(C)	883,699	316,000	
次期繰越収支差額(B)-(C)	1,493,285	1,809,285	

# 理事会(各委員会等)報告

## 研究委員会より

中央大学 森茂 岳雄

研究委員会では、2007～2009年度の共通の研究テーマを「共生社会の構築と国際理解教育」とし、その下に三つのプロジェクトを並行して走らせ、その成果を積み上げ、順次年度毎に研究会やワークショップを通して広く会員に公開し、最終的に研究大会時に特定課題研究としてその成果を共有することになった。

その一つ「ユネスコの世界遺産教育と日本の国際理解教育」(担当理事：田淵五十生)については、これまでに公開研究会を重ね、本年度の富山大会において「ユネスコの動向を踏まえた日本の国際理解教育—世界遺産教育を切り口にしたESD—」をテーマとして特定課題研究を行った。

第2のテーマ「ことばと国際理解教育」(担当理事：山西優二)については、「ことば」の政治性・経済性・文化性・身体性などに着眼しながら、国際理解教育の視点から「ことば」のもつ多様な機能や役割を可能な範囲で整理し、さらにはこれまでの実践を踏まえつつ、これからの新しい実践に向けての課題や方策を提示することをねらいとしている。今後の予定としては、2008年秋～2010年のプロジェクト終了まで2ヶ月に1～2回の割合で研究会を重ね成果の蓄積と公表に向けての準備を行うとともに、2009年3月にはプレフォーラムを開催し中間発表を行い、2009年度の研究大会において特定課題研究として会員への成果の発表と共有を行う予定である。

また、第3のテーマ「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」(担当理事：嶺井明子)については、シティズンシップ(教育)の解明を軸に、グローバル時代の国際理解教育のありかたを考えることをねらいとしている。今後の予定としては、2008年度は、10月5日(日)、12月7日(日)、1月24日(土)、3月7日(土)に研究会を開く予定で調整をしている。2009年度は、6月の大会時に経過報告の機会を設け、11月に公開研究会を開き、2010年の大会にむけて研究を集約していく計画である。研究会の会場は基本的に筑波大学東京キャンパス G308を予定している。

第2、第3のプロジェクトの今後の研究会等の日時、内容等は、その都度学会ホームページでお知らせする。これらのプロジェクトに参加希望の会員は各担当理事まで連絡いただきたい。(山西優二：yyuji@waseda.jp、嶺井明子：miakiko@nifty.com)

尚、各プロジェクトの研究成果は、学会誌『国際理解教育』に特集として掲載される予定である。

## 紀要編集委員会より

同志社女子大学 藤原 孝章

1. 学会紀要『国際理解教育』Vol15の発行スケジュールが確認されました。

論文応募の締め切りは7月22日でした。原稿締め切りは、2カ月後の9月24日。その後何度かの査読をへて、掲載論文が決定し、最終原稿の提出期限は3月10日です。応募論文の取り扱いは、前号に引き続き、研究と実践研究を同列に扱うこと、会員の投稿をすすめること、ていねいな査読をおこない、リライトの仕方などについてもアドバイスすることなどです。また、15号から、新しく「特集論文」を組むことにしました。15号の特集は世界遺産教育を予定しています(ちなみに、第16号は「ことばと国際理解教育」、第17号は「グローバル時代のシティズンシップ」の予定です)。なお、誌面として、学会が行なうプロジェクト、公文国際財団の助成による教員海外研修の報告、書評・新刊紹介などは、前号と同じです。

2. 紀要編集に関わって学会の新しい試みとして「学会賞」を設けることが決まりました。その趣旨は、国際理解教育の研究・実践の成果に対する顕彰です。当学会掲載誌査読論文を対象とするもので、3年に1回とし、若干の賞金・賞品を含めて、若干名の個人または1団体を表彰します(該当者なしもあります)。この3年は、紀要編集委員会の任期と対応するもので、最も早い場合で、紀要14号(2008年)、15号(2009年)、16号(2010年)の掲載論文が対象になります。なお、審査機関は紀要編集委員会です。

## 2007年度事業報告及び2008年度事業計画

学会事務局

理事会開会にあたり、多田会長から、「この1年間、帝塚山学院からスムーズに目白大学へと事務局体制を移行することが課題であった。会員名簿の整理、会計面も含めてどうやら円滑に移行することができた。新入会員の増加、また富山大会での自由研究発表者が最多となったことなど、学会が充実の方向に向かっている。今後も理事の方々のご支援をいただきたい」とのあいさつがなされ、その後、2007年度の各事業の総括に基づき、新年度の事業推進について審議された。

森茂研究委員長からは2007年度～2009年度の共通の研究テーマである「共生社会の構築と国際理解教育」のもとでの初年度の研究推進状況が報告され、総会の場をはじめ、今後広く会員に共同研究への参加を呼びかけることになった。

藤原紀要編集委員長からも、研究委員会での当該年度の研究テーマと連動した特集論文を次号より募集する旨を総会の時に連絡することになった。併せて、学会賞についての議論もなされた。

さらに、①日中韓相互理解のための教材開発ワークショップ、②国際理解教育実践研修会、③国立民族学博物館との共同事業の各事業についても、多くの会員の参加を得て、学会としての昨年度の全体方針が具現化したものとの評価にいたった。引き続き、国際理解教育の実践の普及、また学会員の実践力の向上はもとより、国際理解教育の実践の新たな展開を目指すべく、本年度の事業推進が承認された。

なお、各事業について詳細は、本会報の該当頁をご覧ください。

## 会員だより

### 国際理解教育とは、差別・被差別をこえ、戦争を放棄し、平和を勝ち取ること。

元上越教育大学 二谷 貞夫

敗戦した日本が、無差別絨毯爆撃を平然と敢行したアメリカから学んだものは、人権と民主主義だった。しかし、占領下でそれにプラスされた尊いものが平和だった。ベ平連にしても九条の会にしても日本が生んだ世界に通用する市民運動だ。なぜ通用するのか。それは、人権・民主・平和という普遍的な価値に支えられた運動だからである。人々が国際理解教育に求める究極の目標も人権・民主・平和という3つの価値を人類社会に実現することであろう。そうすれば、戦争がなくなるだろうと考えるからだ。

いま、国際理解教育はこれらの価値を実現する方法として、多文化共生の社会・世界を目指そうとしている。なぜか。現代ほど人類史上数多くの国民国家で人類が分断された時代はないからだ。これほど人類自体の相互理解が困難な時代はない。国際理解教育に携わっている人にその自覚はあるだろうか。本来、人類は一つで、学問上社会集団として「人種」や「民族」も存在しない。といっても現実に社会的な差別・被差別による「人種」「民族」のレッテルは貼られてきた。「人種」や「民族」がなくても「人種問題」や「民族問題」は差別・被差別によって起こされてきた。ユダヤ人問題が実証済みだ。しかし、パレスチナ・イスラエル問題として世界を巻き込んでいる。

留保や逡巡していたカナダ、オーストラリアやアフリカ諸国を含めた国民国家群が、昨2007年秋の国連総会で「国際先住民の10年」をやっと採択した。しかし、世界各地の先住民が、そこで先住『民族』として権利要求する建前と実体との取り違えがおきないとも限らないのである。マジョリティと国民国家は先住民とマイノリティとどう多文化共生するのか、紛争でない『和解』という新しい概念づくりを含めた解決の道をあきらかにすることが常に求められている。人権・民主・

そして平和という国際理解教育の真髄・本質を考えていきたいと思う日々である。  
(2008年4月17日稿)

写真解説：東京都慰霊堂はこの増築部分に東京大空襲の身元不明の遺骨を納めてある。もとは、関東大震災の身元不明の遺骨を納め、犠牲者の霊を祀る震災記念堂として建てられた墨田区の横網町の公園内にある慰霊施設である。



東京都慰霊堂（東京都墨田区横網町）

### 実践的英語教育と国際交流を通しての人材

荒江学習塾・両毛青少年国際交流クラブ 荒江 周三



国際キャンプでの交流風景

学習塾を始めて四半世紀、受験勉強では苦しんだ割には、何の役にも立たず、甚だ疑問になりました。しかも教室では、英語を学ぶことの意義や国際理解の大切さなど、まるで宇宙の果てのこのようです。

そこで、17年前からアメリカ人を教師として雇い、幼稚園生から教育し、また、少数の生徒をを引率して、日本全国の様々な国際キャンプに参加・視察しました。やがて、国際教育団体との関係ができ、様々な国の高校交換留学生と地域の高校生・自分の生徒が普段から付き合える環境を整え、自分独自で国際キャンプを開催するようになりました。今年で13回目の関東国際交流キャンプを開催することになります。

平成12年には「両毛青少年国際交流クラブ・ライシー」を立ち上げ、中学生から大学生までの生徒達が自ら生徒会を組織し、自主的に国際交流活動を行う青少年の育成団体となりました。

留学生とお友達になり、タイやモンゴルのストリート・チルドレンの救済に現地に赴いたり、現地にパートナー団体も作り、定期的に支援活動しています。それにより、「僕の夢は、お金を貯めてタイにストリートチルドレンが働ける工場を作ること。」という子もでて来ました。自分で問題点を発見し、解決の行動にできるようになったのです。「何でも、経験してみなければ分からないよ。」

ですが、全員が全員こういう風になれるわけではありません。テスト志向の親に潰されたりする子。進学校でのオーラル・コミュニケーションの時間に文法を教えているという未履修問題、だれも告発しません。社会に出てから世の中に尽くすという実学から遠く離れたすべて受験に即した近眼的教育がまだまだまかり通ってます。入試のあり方を、世の中の問題解決型・未来を切り開いて行ける能力を持っているかどうかの実学型に転換しなければならないでしょう。

## アメリカ合衆国の建国期の 国際理解に関する考察

日本女子大学 田部 俊充

2003年6月、ハーバード大学教育学大学院図書館では、第20回地国学史会議において、特別展示「地理教科書と地図帳 1802-1934年」が開催された(写真)。出展されていた地理教科書・地図帳の一覧表を作成すると、全61点であった。その中で一番出版年数が古かった教科書が、モース(Morse, Jedidiah 1761-1826)の『易しい地理』(1802年版)であり、一番出展数が多かったのは、「パーレー万国史」として明治期以降の日本にも影響のあったグッドリッチ(Goodrich, Samuel Griswold 1793-1860)の5点の教科書・地図帳であった。

建国期は、アメリカが国家の基盤を形成しつつある時代であり、はじめは相互の州、建国後はほかの国との交渉の中で、相互理解、国際理解をする上で重要な情報ツールとなったのが地理教科書であった。地理教科書の記述には、当時の多岐にわたるアメリカの世界像が示されていた。

モースは、ボストン近郊チャールズタウンの会衆派教会牧師として活躍しながら、『易しい地理』(1790)、『米国万国地理』(1793)などの地理教科書を執筆した。『易しい地理』における日本の記述は、第2版では15行であったが、第14版では35行へと記述量が倍増する。記述内容も「中国からの距離、肌の色、身体の特徴」から「周囲の距離、地形的特徴、鉱物、地震、宗教、政治、軍事力、産業」など多岐にわたった。

注目したいのは、アジア・イメージである。教科書を分析して、アジア・イメージ、特に日本、中国、インドのイメージ比較を行った。モースの記述は、18世紀後半のアメリカにおけるアジア・イメージを反映していると思われるが、アジアの各国については友好的なイメージであったことが読み取れる。

建国期のアメリカにおいては、ワシントンやジェファソンといった指導者が、世界認識、国際理解の重要性を認め、

共和国市民の教育的な基盤を築こうとした。現代の日本においても、世界認識の重要性を問いただす必要があるのではないだろうか。

今秋、研究の一端を『アメリカ地理教育成立史研究』(風間書房)として公刊を予定しています。批評していただければ幸いです。



ハーバード大学教育学大学院図書館特別展示  
「地理教科書と地図帳 1802年-1934年」

## Pearl Harbor Workshop: History, Memory, Memorial に参加して

金城学院高等学校 柳瀬 公代



授業案作成グループのメンバーと共に

日本国際理解教育学会を通してパールハーバーワークショップを知り、ハワイ大学 East West Center で開催されたワークショップに参加しました。勤務校が40年近くに渡りフロリダで行っていたアメリカ語学研修を、今年の夏からホノルルに移行したため、今後の事前学習や現地プログラムの開発に役立てたいと思ったからです。

ワークショップで示された、歴史のどの事実をどのように記憶するのかについて、国や民族間で共有し、相互理解を図っていくことの必要性は、私にとって国際理解教育の新しい視点でした。ワークショップでは、真珠湾攻撃に関する、ハワイで育ち生きるアメリカ人歴史家や米軍の記憶、サバイバー、日系アメリカ人、ハワイ先住民、そしてオーストラリア人の記憶が示されました。アメリカ人歴史家からは、1941年12月7日(日本では、12月8日)に日本軍が行った攻撃の実態についての詳細な記憶が示されました。アリゾナメモリアルやヒッカム空軍基地では、日本軍の攻撃の跡がそのまま残され、「準備を怠るな」という戒めを持って、記憶されていました。また、戦争記念碑や博物館のパンフレットには、自由を勝ち得るための戦争・犠牲やヒーローの文字がありました。私は、最初、これらの米側の記憶に違和感を覚えましたが、日本のアジア侵略や原爆に焦点があたっていた私の記憶に、今一度、米側の視点を加える機会となりました。

ワークショップは、日米の中・高教員の共同作業による授業案作成で締めくくられました。日米の教師及び生徒が、日米の戦争に関する双方の記憶を、ITを利用して共有し、相互理解を目指す、共同の授業づくりの可能性を探ることができました。

アリゾナメモリアルや日本文化センター等の訪問では、生徒向けの教育プログラム等、語学研修に利用できそうな学習素材を知ることでもできました。今後、これらを利用した多面的にハワイをとらえる研修プログラムをつくっていきたいと思います。



## ESD は遠い?それとも …

聖心女子大学 (院生) 曾我 幸代

ESD を学ぶ機会を得て、2年の月日が経つ。昨夏、聖心女子大学で開催された環太平洋ESD国際会議にボランティアとして参加し、ESDの海外の実践に刺激を受けた。そして、今春行われたラオス・タイへのスタディーツアーに参加して、ノン・フォーマル教育におけるESDの好事例を訪問・見学する機会を得た。両者の経験が、今の私の活動を支えているといっても過言ではないと思う。

どの実践を見ても、必ずキーパーソンとなる人がいる。昨夏の国際会議の参加者が、それぞれの教育実践のキーパーソンだったように。そして、今春のスタディーツアーの基調講演者もそうであった。キーパーソンとなる資質を持った人にしか、ESDは実践できない特別なものなのだろうか。しかし、スタディーツアーの基調講演者は言われた。「あなたたちから始めなさい。」と。「わたしから始めるESD」…何ができるのだろうか。私たちツアー参加者が共通認識として持ち帰ったことは、ツアー中に感じたことを日本に帰国しても周りの人に伝えていこうということ、ただそれだけだった。これが、ESD実践者キーパーソンがもつ資質足りえるのであろうか。キーパーソンにはなりえなくても、きっと私たちから始められるESDはあるはずである。それが何かを模索しながら、私は身近な大学で取り組みを始めた。きっとそれが、始まりになると信じて…。

まだESDであると言われていない実践が、世界中には数知れずあるだろう。誰かがESDだと言わない限り、それは、ESDになりえないのか?私はそうではないと思う。ESDといわれなくても、持続不可能な「社会」を、持続可能な方へと進めている活動・プロセスこそESDなのであると最近思う。ESDは、遠い存在ではなく、身の周りにあるもので、私達のすぐそばにあるように思える。そして、私達がそれに気付くこと、そして始めることがESDの始まりであると思う。



世界遺産ルアン、パバンの国立博物館前で

## 国際理解教育の「理解」にむけた ミニナラティブ

苫小牧駒澤大学 伊藤 勝久



日本、台湾、米国の国旗と我が家族

20代最後の年に渡米、ピッツバーグ大学の教育／社会比較分析にて故 Rolland G. Paulston 先生に師事する。情報教育の知識／方法を学ぶ短期留学のつもりが、教養学部で助教の職を得た事、クラスメイトだった台湾の留学生が人生のパートナーになった事、比較教育学世界への Paulston 先生のお誘い等チャンスに恵まれ、思わぬ長期滞在となった。8年前に単身発った成田に、米国で生まれた二女兒を含む家族四人で降り立った際には感慨深いものがあつた。

しかし多文化・多国籍、頼りになる親類縁者のいない我々家族には、祖国の空気は厳しかった。きちんとした経歴が無い／高齢である／外国人と結婚した「あなたが悪い」という不可解な機会原理と自己責任論によって、我々家族の逸脱ぶりを「これでもか」と認識させられた。職を得どころか部屋も借りられず、家族で路頭を迷う日々もあつた。

米国ではアジア系故の嫌がらせや脅迫から生活に危害が及ぶ事が幾度かあつた。しかし、いつも「普通」の人達（時には通りすがりの人）が彼／女等の身体をはって支援してくれた。日本において、異質な我々家族に対し「普通」の人達が常に抑圧者として存在した事とは大きく異なる。窮状を知る旧友や恩師は支援を惜まず未だに感謝の念に堪えないが、彼／女等は私とは特別な関係を持つ人達である。

「普通」の人達も「ふつう」に生活する事ができなくなった時、逸脱者となり被抑圧者となる。ニューカマーや「外国人」でなくとも、事故や失業、心身や家族の喪失によって、誰もが社会の主流ではいられなくなる。

国際理解教育の「理解」とは、他国のメタ文化を「普通」世界に翻訳／定義づけする事ではないと思う。「普通」の人達にとってあまりに「ふつう」で気にもとめない、社会を組織化する「抑圧」の構図に気が付く事であると思う。誰もが「ふつう」に抑圧者を演じている事、その「理解」無くして何の「他者」理解であろうか。

# 公文国際奨学財団・海外派遣報告

## 若者を大切に育む国々を訪問して

新潟市立白根北中学校 荒川 洋子

富山での学会の研究大会直前に起こった秋葉原の事件は、多田会長もご挨拶で述べられていたとおり、日本中を震撼させただけでなく、この国が、教育や社会のしくみそのものを考え直さなければならない時期にきていることを知らしめるような事件だった。「ワーキングプア」ということばさえ生まれてしまった日本で、若者たちは将来に希望をもっているのだろうか？自分自身を大切に思っているのだろうか？そんな疑問を胸に、この度、フランス、イギリス、ベルギー、オランダの4カ国の若者総合支援施設・NPO、行政担当部署等を合計21カ所訪問し、若者支援の現状と社会教育や社会福祉の現場での市民性教育的活動の状況取材してきた。

フランスでは、1968年以降、若者が情報を得ることによって人生を豊かなものにしていくための総合的な若者情報センターが、若者スポーツ省と地方自治体、NPOの共同で整備され、国内1600カ所でサポートを行っている。イギリスでは、過去の不況下での若者の失業対策を出発点とし、主に就労支援を目的とした「コネクション」というセンターがこの4、5年の間に急速に整備され、成果を上げている。ベルギーでは、多民族、多文化の状況の中で、混血や多文化を背景にもつ若者のアイデンティティや共生の問題などについて積極的な支援が行われている。また、若者にとっては“自由な国”として有名なオランダでは、街で若者に直接接触し、相談にのったり、情報を提供したりする「ストリートエデュケーター」という若いプロの社会福祉士が、生き生きと活躍している姿が印象的だった。

いずれの国においても、ドラッグや暴動など若者をめぐる深刻な問題は存在している。しかし、若者を社会に積極的に参画する「市民」として育成することが重視され、支援の仕組みも整っていることから、前向きに生きようとしている若者が多いように感じられる。今回の研修で得た多くのことを、「生きにくい」といわれる日本の社会で、そして教育現場で、将来に希望の持てる若者を育成するために生かしていきたいと思う。



ロンドン・ブリクストンの「コネクション」にて

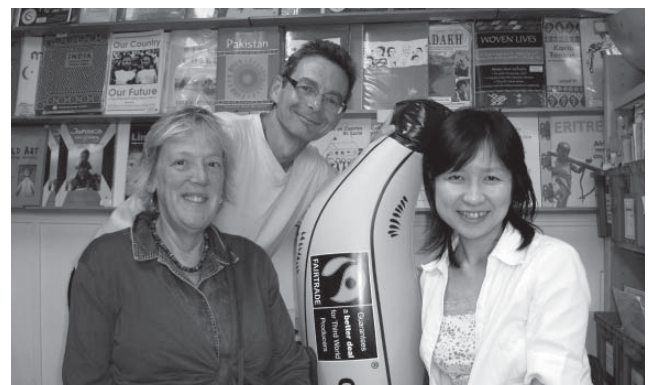
## 学校におけるシティズンシップ教育のあり方を探索して

宮城県仙台東高等学校 石森 広美

グローバル化と多文化化の進展、地球規模的課題の山積という社会情勢に加え、アイデンティティの拡散、モラルの低下などへの対応等、国際理解教育が果たすべき役割にも新たな側面が加わっている。今回、学会のご推挙と公文国際奨学財団のご支援をいただき、国際教育研修を行う好機を得た。「多文化共生教育」と「グローバルシティズンシップ」の二点を研修の要点に設定し、二カ国において研修を実施した。

シンガポールでは、多文化共生意識の高揚を図る学校行事を中学校と高校において参与観察し、担当教諭にインタビューを行った。特に、訪問した高校において、多民族文化を体験的に理解するための10種類以上の多彩なワークショップが実施されていたことが印象的であった。インドやマレー、インドネシアの舞踊や民族音楽、パティック染め、中国書道などシンガポールの多民族文化に関わる種々の活動に、生徒たちは熱心に励んでいた。また、国内唯一の教員養成機関である国立教育研究所（NIE）において、市民性教育についてもお話を伺うことができた。

英国では、ロンドン大学にある開発教育研究センターやヨーク・セント・ジョン大学内にあるグローバル教育センターを訪問し、グローバル学習のあり方や学校カリキュラムにどのようにしてグローバルな次元を取り込むか、そして英国におけるグローバル教育がどのように展開されてきているのか等について有益なお話を伺うことができた。またOxfamやrisc、DEAなどの開発教育関係機関でのディスカッションも意義深いものであった。英国では学校、地域、行政、NGOや教育慈善団体等が連携を図り地球市民育成において協働している。この点は、日本も参考にすべきであろう。今回の研修で得たことは、国際教育プログラム構築や授業改善等、現場で最大限還元していく所存である。最後に、暖かいお励ましを下さった多田会長を始めとする学会の先生方、イギリス研修に際して数々の具体的ご助言を下さった藤原先生に心より感謝申し上げます。



ヨーク・グローバル教育センターで Chrissie さん、Mick さんと一緒に

## お知らせ -これからの行事／イベント案内-

### 国際理解教育の実践方法についての研修会の開催について

毎年、新しく多くの方に学会員になっていただいております。今後もさらに新入会員が増えると思われます。学会として、ただ入会してもらうだけでなく、新入会員の方に何らかのフォローをしていくことが、現場での国際理解教育実践の普及、学会活動の充実には必要と考えます。そこで、下記のような研修会を計画しています。

なお、国際理解教育に関心をもっている初心者の方、国際理解を扱った授業を行いたいと思っている小・中・高等学校の教員、大学生及び国際交流・国際協力に関心のある方の参加もお待ちしております。

#### <記>

(1) 「鯨をテーマとした国際理解教育の実践」(2008年10月24日、東京都板橋区立志村小学校)

(2) 「博物館を活用した国際理解教育」(仮題)(2009年2月21日、香芝市公民館)

問い合わせ先及び申し込み先等の詳細につきましては、決定次第、学会 Web ページ (<http://www.kokusairikai.com/>) でお知らせします。ご覧いただけると幸いです。

### 寄贈図書

- 池田充裕・市川誠・奥村真司・鈴木康郎・手嶋将博『東南アジアの初等教育段階における英語教育の受容と母語教育への影響』(研究成果報告書) 2008年
- 佐藤郡衛・片岡裕子編著『アメリカで育つ日本の子どもたち—バイリンガルの光と影』明石書店、2008年
- 青山晴美『アボリジニで読むオーストラリア—もうひとつの歴史と文化—』明石書店、2008年
- 研究代表者：嶺井明子『価値多元化社会におけるシティズンシップ教育の構築に関する国際的比較研究』最終報告書、平成17～19年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書、平成20年3月
- 田中治彦『国際協力と開発教育—「援助」の近未来を探る—』明石書店、2008年
- 米山周作『「虹の国」へ—南アフリカ共和国を訪れて—』『学習院高等科紀要』第5号、2007年所収
- 米山周作『カンボジア—国連児童基金(UNICEF)の活動を通して—』『学習院高等科紀要』第6号、2008年所収

### 事務局からのお知らせ

#### ◆会員の図書・文献寄贈のお願い

会員の皆様の関わられました文献・図書・報告書・教材など、また、会員の所属する学校での紀要等がございましたら、学会にご寄贈ください。その際、助成金をいただいております公文国際奨学財団にも送らせていただきますので、できましたら2部お送りください。

#### ◆年会費納入のお願い

当学会の活動は会員の皆様の会費でまかなわれております。今年度までの年会費未納の会員は至急会費をお支払いくださいますよう宜しくお願いいたします。

・会費：正会員 : 8,000円                      学生会員 : 4,000円                      団体会員 : 30,000円  
・郵便振り込み

口座番号    00120-5-601555

加入者名    日本国際理解教育学会

#### ◆住所・所属等変更連絡のご協力をお願いします!

事務局からの郵送物が「転居先不明」で返送され、また、会員のみなさまへのご連絡が滞ってしまっている場合が少なからずあります。

所属変更によるお引っ越しなどで住所・所属等に変更がありましたら、ファックス(03-5996-3166)または、Eメール(kokusai@mejiro.ac.jp)でお知らせください。また、会員種の変更もお知らせください。

# 事務局通信

## 新入会員

以下の32名の方が2008年6月13日までに入会を承認されました。

氏名	所属	氏名	所属
堀井 広伸	創価学会文化平和運動部	許 信恵	韓国教員大学校
權谷 紅美子	大阪女学院短期大学	佐藤 広子	日本女子体育大学附属二階堂高等学校
尾崎 茂	拓殖大学	荒川 裕紀	北九州工業高等専門学校
辻 良隆	大阪市立南高等学校	吉村 功太郎	東北学院大学
野呂田 純一	(財)かながわ国際交流財団	木下 永子	埼玉大学大学院教育学研究科
清水 貴恵	中井町立中村小学校	水野 涼子	聖心女子大学大学院人間科学専攻
西村 克仁	同志社香里中学・高等学校	福元 千鶴	鹿児島東高等学校
中和 悠	広島大学大学院国際協力研究科	秦 莉	奈良女子大学大学院人間文化研究科
朝倉 淳	広島大学大学院教育学研究科	深谷 友美子	早稲田大学大学院社会科学研究科
浅野 博子	広島大学大学院教育学研究科	川勝 章代	京都府総合教育センター
小林 真史	北海学園札幌高等学校	田部 俊充	日本女子大学
手島 利夫	江東区立東雲小学校	浜田 麻里	京都教育大学
坪内 雅治	佛教大学大学院教育学研究科	仁志田 華子	立教大学大学院
藤原 隆範	広島大学附属高等学校	眞島 拓也	上越教育大学大学院学校教育研究科
小嶋 薫	東京福祉大学	志賀 照明	神戸市立摩耶兵庫高等学校
鶴飼 優衣	神戸女学院大学	B.Oyuntsetseg	日本大学大学院文学研究科

### ◆紀要『国際理解教育』の購入手続きについて

現在、第1号を除き、最新の14号までの在庫がございますが、在庫が僅少の号も出始めております。学会ホームページにバックナンバーの総目次が掲載されています。ご希望の号数および冊数をファックスまたはEメールで事務局までお知らせください。振り込み用紙をお送りいたします。なお、会員の皆様には、会員価格でお求めいただけます。

### ◆第9回韓国国際理解教育学会のご案内

第9回を迎えた韓国国際理解教育学会の研究大会が下記の予定で開催されます。例年、日本から10名以上の参加者があり、研究発表やシンポジウムでは、熱い討議が繰り広げられています。また、日韓の友情を深める場にもなっています。ぜひ、多くの会員のご参加を期待しています。参加ご希望の方は、メール等で事務局までご連絡ください。

なお、自由研究発表をご希望の方は、タイトルを添えて、学会事務局までご連絡ください。発表をご希望の方には、後日、発表抄録、発表時間など詳細をお知らせいたします。また、発表時には例年、韓国語の通訳がついています。

### 記

日 程：2008年11月8日(土)・9日(日)

会 場：チュンナム大学 忠清南道(チュンチンナムド) 大田(テジョン)

主 催：韓国国際理解教育学会、ユネスコ・アジア太平洋国際理解教育センター

経費及び渡航手続き：渡航、宿舎に関しては原則として各自手配をお願いします。大会参加費は韓国学会の負担の予定ですが、その他は自己負担です。また、韓国の学会から詳細な情報が届いておりませんが、参加希望者には分かり次第情報をお届けいたします。

### ◆学会ホームページのご案内

研究大会やワークショップなどの情報をご覧いただけます。アドレスは次のとおりです。<http://www.kokusairikai.com/>

### ◆2009年度(平成21年度)第19回 研究大会

開催日時：2009年6月13日(土)・14日(日) 開催会場：同志社女子大学(京都府京田辺市)

実行委員長：藤原孝章(同志社女子大学教授)